



第 21 回 BC 州日本語弁論大会
2009年3月7日(土)
優秀作品集

BC 州日本語弁論大会実行委員会

この作品集は、参加者の原稿を元に BC 州日本語弁論大会実行委員会が編集したものである。

第 21 回 B C 州日本語弁論大会

日時：2009年3月7日 土曜日 午前10時00分

場所：UBC アジアセンター、オーデトリウム

コーディネーター：Rebecca Chau (UBC/ブリティッシュコロンビア大学)
Noriko Omae (SFU/サイモンフレーザー大学)

司会者：Laura Russell (UBC)

Reo Shimada (UBC)

Sadie Deng (UBC)

Daiki Tajima (UBC)

Emily Yu (UBC)

審査員：Scott Aalgaard (Global Partners Institute)

Motoaki Egawa (JALTA)

Ihhwa Kim (UBC)

Susan Kimura (UBC)

Keiko Koizumi (UBC)

Kazuko Mito (Capilano College)

Noriaki Nakajima (JALTA)

Seiichi Otsuka (Consul General of Japan in Vancouver)

Hitoshi Shimoda (Konwakai)

Yukiko Shiroki (Sentinel Secondary)

Hiroe Wood (UNBC)

Matthew Yoshitake (Kiyukai)

出場者：

【高校 初級】

1. Moo Kyung Choi ちちのあい Father's Love
2. Cindy Hu 私のテディーベア My Teddy Bear
3. Ray Kim 「りさんかぞくのであい」でなったこと
Lesson from the Meeting of Korean Dispersed Family
4. Eva Kung 私の最初の冬のキャンプ My First Winter Camp
5. Leon Lam いのち Life

【高校 中級】

1. Vivian Chen はじめの一步 First Steps
2. Grace Lee ハイクコンテスト Haiku Contest
3. Sang Min Lim アメリカ大統領から感じる人種について
Feelings about the Race Issue from the President of United States
4. Kelly McLaughlin 私と日本語 Japanese and Me
5. Maggie Sam もうひとつの家族 Another Family

【高校 オープン】

1. Jacqueline Chiu おいしい笑顔 I'm Lovin' It
2. Jeff Oh 私の学校生活 My School Life
3. Semi Ok 私たち家族のスペシャルな思い出 My Family's Special Memory

【大学・一般 初級】

1. Morgan Hawrelluk どうして日本語をべんきょうしはじめましたか？
Why did I start studying Japanese?
2. Tony Ni 夢の道 The Dream Road
3. Anais Pang あきらめないで Never Give Up
4. Ah Young Park 一番大切な存在 The Most Important Person
5. Jacob Park 心の方向 The Way of the Heart
6. Iris Wan 十年前の私と十年後の私 In the Past Ten Years: The Lesson
7. Julianna Weisgarber 基礎が与えてくれたチャンス Opportunity from the Basics
8. Heather Wilkinson リスクを負うということ Taking Risks

【大学・一般 中級】

1. Anna Kim 夢探し Finding Future
2. Chan Mi Lim 日本のブックオフ The Book Off of Japan
3. Kyle Vandersteen 温泉の良い点 Onsen's Good Points

【大学・一般 上級】

1. Stephanie Ching 見てもらう事は、認めてもらう事 To be Seen is to be Acknowledged
2. Grace Ho 若い頃の声 The Voice of My Youth
3. Jay Kim 信頼の重要性 The Importance of Trust
4. Yan Xu 民族の間の調和 Harmony Among Ethnicities

【大学・一般 オープン】(該当者なし)

入賞者

【高校部門】

初級部門

第1位	Ray Kim	「りさんかぞくのであい」でなったこと」
第2位	Leon Lam	「いのち」
第3位	Cindy Hu	「私のテディーベア」
特別賞	Moo-Kyung Choi	「ちちのあい」

中級

第1位	Maggie Sam	「もうひとつの家族」
第2位	Vivian Chen	「はじめの一步」
第3位	Grace Lee	「ハイクコンテスト」
特別賞	Sang Min Lim	「アメリカ大統領から感じる人種について」

オープン

第1位	Jeff Oh	「私の学校生活」
第2位	Semi Ok	「私たち家族のスペシャルな思い出」
第3位	Jacqueline Chiu	「おいしい笑顔」

【大学・一般部門】

初級

第1位	Jacob Park	「心の方向」
第2位	Anais Pang	「あきらめないで」
第3位	Ah Young Park	「一番大切な存在」
特別賞	Julianna Weisgarber	「基礎が与えてくれたチャンス」

中級

第1位	Kyle Vandersteen	「温泉の良い点」
第2位	Chan Mi Lim	「日本のブックオフ」
第3位	Anna Kim	「夢探し」

上級

第1位	Stephanie Ching	「見てもらう事は、認めてもらう事」
第2位	Yan Xu	「民族の間の調和」
第3位	Grace Ho	「若い頃の声」
特別賞	Jay Kim	「信頼の重要性」

「りさんかぞくのであい」でなったこと

Ray Kim

2000 ねんのなつ、ぼくはちちとそうるにある「りさんかぞくのであい」というめんかいにしゅっせきしました。りゆうはちょうせんせんそうのときにはなればなれになってしまったちちかたのおとうさんをさがすためでした。このめんかいはじゅうねんにいちどだけしかおこなわれずさんかできるにんずうもかぎられているのできちょうなけいけんができてほんとうにうんがよかったとちちが言ってました。ちょうせんせんそうはちちがごさいのときにおきたもので、それいらいちはおじいさんにいちどもあうことができませんでした。「おとうさんはまだいきているのか?」「げんきでいるのか?」とちちはこどものころから なやんできたそうです。

めんかいのひ、ぼくははじめておじいさんにあえるということでもうれしかったです。しかし、おとうさんはひさしぶりにおじいさんにあうのにきんちょうしたのかあさからひとこともはなさなかつたです。めんかいのばしょについて、「りさんかぞくのであい」とおおきなもじでかいてあるへやにはいりました。そのへやのなかにはぼくたちのようにはなればなれになっているかぞくをまっている ひとたちでいっぱいでした。めんかいのじかんになり、りさんかぞくたちは じぶんたちのかぞくのなまえをよびながらひっしに さがしました。そのとき、あさからきんちょうしてなにもできなかつたちちがいきなり「おとうさん!」とよびながらむこうでてくるひとりのおじいさんのところへはしっていきました。ごじゅうねんかんいちどもかおをあわせなかつたおじいさんとだきあうときうれしすぎてなみだをながすおとうさんのすがたはいまでもわすれられません。

このめんかいのあと、わたしはいくつかのぎもんをおもいだしました。なぜわれわれはなればなれにならなければいけないのでしょうか?なぜわれわれはおなじかんこくごをつかって、かんこく りょうりをたべて、おなじぶんかを もっていても、かんこくじん、ちょせんじんとちがうよびかたでよばれなければいけないのでしょうか?たとえちがうしくみのなかですんでいても、われわれはかんこくのみんぞくです。かぞくにじゅうねんにいちどしかあえないというのはとてもざんこくです。だからこそわたしたちはひとつになるべきだとぼくはおもいます。

命

Leon Lam

「宝物は何ですか。」ときかれたら、以前は「ペットの亀や友達です。」と答えていました。でも、今は違います。僕は、「命です。」というでしょう。

僕には十四才上の姉がいます。姉はひとりでホンコンに住んでいます。腎臓結石をわずらい、先月手術を受けることになりました。僕はそれまで、どんな悲しいドラマを見ても、命について、そんなに深刻に考えたことはありませんでした。それが、姉の手術の話を知ってから、突然、「命」についていしきしはじめたのです。

僕は姉を本当に守りたいと思いました。遠いので何もできないけれど、毎日寝る前に「姉はだいじょうぶだろうか。姉が死んだら、どうしよう。」などと考え、なんだか恐ろしい気持ちになりました。そのときのきもちはことばでは言い表せないものでした。その後、姉の手術は成功しましたが、この姉の事件がきっかけになって命についてまじめにかんがえはじめました。

命は、命そのものではなく かぎりなくほかのものにつながっていることに気がついたのです。僕の命は僕だけの命じゃありません。僕の命は家族や友達の命でもあるのです。これが人間の絆です。誰かが死んだら、その家族も周りの人もみんなが絶対悲しいのです。だから、僕の命を大切にしなければならないのです。そして、その命は話したり考えたり愛したりできるのです。悲しくても、さびしくても、生きているからこそ、この気持ちを感じることができます。僕が幸せならば、周りの人も幸せになるでしょう。

僕の幸せはほかの人を幸せにすることです。今ボランティアクラブで子供たちやお年寄りのためにはたらいています。子供たちと一緒にケーキやクッキーを作ったり、ろうじんホームでイベントがあるとき、てつだっています。うれしそうなみんなの顔を見ると、僕も幸せです。大変な時もあるけど、このクラブはだれかを助けることができるからとてもいぎがあります。

僕の命を大切にしたいから、ほかの人の命も大切です。そして、「生きているからには、幸せでなくてはならない。」とぼくは思います。

みなさんけっしてぜつぼうしないでください、一緒にかちある命を生きていきましょう。

私のテディーベア

Cindy Hu

みなさんは、なやみごとがある時、だれが心の支えですか。大好きなペットですか。そばにいる友達や兄弟ですか。私は一人っ子で兄弟がいません。そして私は動物が大好きだけれども、両親がだめと言うのでペットを飼っていません。でも、私には大切な話し相手があります。それは私のテディーベアです。

2才の時、私は平日は保育所で生活しました。家族から離れて、心理的なたよりになるのはテディーベアでした。私は毎晩それをだきしめて、ねむることができました。テディーベアは私を支えてくれました。それから、より多くのテディーベアをもらいました。それぞれに思い出があります。誕生日プレゼントのは小さい時の友達との生活を思い出させます。ほかのテディーベアを見るとコンクールやイベントを思い出します。

最もはっきりした思い出は大きいパンダのぬいぐるみです。私がカナダに移住する時、友達からの送別の贈り物でした。いつもこれを見ると中国の友達や親戚に会いたくなります。だから、私はこの中国の国宝を一生大事にします。その頭にあごをのせて、私は常に友愛を感じることが出来ます。その目を見つめて、友達の微笑みと「がんばって」と言ってくれた表情が私の心の中に浮かびます。

今、私は若い成人として、更にテディーベアを必要としています。大きくなるにつれて、期待がますます自分にプレッシャーをかけます。勉強、進学、家族、友達関係、全てのことが困難で、私はずっと自分をコントロールすることができません。気持ちをちょうどせつするために、私はベッドにすわって、かべにもたれて、テディーベアを抱きしめます。静かな夜に、テディーベアに話しかけます。いつもテディーベアは私に決してあきらめないように励ましてくれます。その手で涙をふいて、私を元気づけてくれます。

私はいつまでもテディーベアが宝物です。これからもずっとテディーベアを大切にしていけます。

もうひとつの家族

Maggie Sam

私の家族は家にいる家族だけじゃありません。インターネットの中にもう一つの家族がいます。私達はとても仲が良く、まるで本物の家族みたいです。トロントにいる、フロレンスは私の二年上なので、お姉さんに思えます。ニュージーランドのもう一人のアンジェラは私と同年で、色々な事を自然に話す事ができます。二人とは四年前にブログ・サイトで出会ったので、初めから話しやすかったのです。毎日、家に帰ってコンピューターで、その二人と話す事を楽しみにしています。

私は昔そうだんしたい事があっても、誰にも話せませんでした。家族には話したくなかったし、学校の友達と言っても、本当に本気で聞いてくれるとは思えませんでした。いつも一人ぼっちでした。ある日、どうしようもなくなって自分の悩み事を全部ブログに書きこみました。もうたえられなかったので、その辛い気持ちを誰かに伝えたかったのです。一分もたたないうちに二つのコメントがありました。「ファイト！もし誰かと話したいなら、私はここにいるよ！ゆっくり聞くから、マギー、笑って。」「頑張れば、あなたは何んでもできるよ！私はそう信じています。だから、元気出して！」この二つのコメントを見て、ビックリしました。まさか、知らない人とプライベートの事を話すなんて、考えてもいなかったからです。それ以来、私にとって二人は本当に大切なそんざいになりました。この二人から勇気をもらいました。「もう一人じゃない。」と強く思わせてくれました。

もちろん、インターネットで出会う人は本当にあんなのかどうか分かりません。母も心配しています。それでも、この二人を信じています。前より明るくなり、そして二度と悩みのせいで泣く事はありません。

もし、この二人と出会っていなかったら、私はどうなっていたかと時々考えます。だんだん自分の事が嫌いになり、自分を傷つけていたかもしれません。きっと、すごくさびしい人間になっていたでしょう。こうやって考えると、ちょっと怖いです。インターネットでの出会いは、とかく色々言われませんが、私のようにもう一つの家族に救われる事もあるのです。私も遠くの誰かを助けたい、誰かの味方になりたい、誰かのもう一つの家族になりたいです。

はじめの一步

Vivian Chen

「冬休みにまた台湾に来ますか。」台湾の小学六年生のシンディからメールがとどきました。このメールを読んで、去年の夏休みの台湾でのボランティア A.I.D プログラムの事を思い出しました。四年前、台北けいざい文化代表省は、A.I.D プログラムを始めました。これは、毎年、夏、十六歳から二十四歳までの三百人いじょうのカナダ人とアメリカ人をボランティアとして呼んで台湾のめぐまれない小学生に、英語を教えるプログラムなのです。

私は、母からこのプログラムに行くようにすすめられた時、全然きょうみがありませんでした。こどもがきらいで、教える事も好きじゃなかったのです。今はこの経験で少しわかりました。でも、もっとも心にのこったのは、ほかのボランティアの人達と知り合い、住んだ事がない村の学校で、一か月集団生活をおくった事です。このプログラムからリーダーシップと にんたいと せきにんかんと自信を学びました。

こどもを教える時、リーダーシップを取らなければならないし、内気だった私が、初めて毎日、しゅうだんの前で話さなければなりませんでした。さいしょは緊張しましたが、すこしずつ自然に話せるようになりました。私はにんたいがあまりありませんでしたが、小学生を教えるうちに、だんだんにんたい強くなってきました。じゅぎょうのプランは自分でつくるので、毎日、次の日のレッスンの予習をして、じゅぎょうの準備をしました。時間におわれ大変でしたが、やりとげる せきにんかんもみについてきました。

同じ学校のボランティアは七人で、一か月、毎日何をやるにもいっしょでした。食べるのも、教えるのも、遊ぶのも、この七人だったから、私達はしだいに なかよくなりました。集団生活は今までした事のない経験でした。カナダの学校の友達とも、インターネットの友達ともちがいました。みんなで村をほうもんしたり、ほかのちいきもまわりました。毎年夏、台北にだけ帰っていた私が、行った事のないちいきでした。

A.I.D プログラムは私に新しい世界を見せてくれただけでなく、将来ひつようなスキルをたくさん学んだり、新しい友達と出会ったりするチャンスもあたえてくれました。

この夏の経験は、新しい私の、小さなはじめの一步になりました。

ハイクコンテスト

Grace Lee

あれは私が中学校一年生だったときのある日でした。先生は私のクラスにはいくをかい、えもかくえいごのしゅくぐだいをくれました。先生がいっしゅうかんもじかんをくれたけれど、ていしゅつ日のまえの日までしなかつたから、みじかいじかんにできたんです。そのときからさんかげつぐらいすぎたある日、私のクラスはやすみじかんのあとで、きょうしつにもどりました。つぎはたいいくのじかんでしたけれど、先生がそのまえにはなしがあるといいました。さんかげつまえのあのはいくのしゅくぐだいをなにかのコンテストにおくったことをおしえてくれました。私たちはしらなかつたから、びっくりしました。そして、先生はもっとおどろくようななしをしました。そのコンテストはBCしゅうとアルバータしゅうのこどもたちがおくったコンテストだったけど、クラスのある人がにゅうせんしたといいました。それをきいて、みんなはその人はクラスのあるおとこのこだとおもいました。そして先生がそのこをみながらにゅうせんした人のとくちょうをひょうげんしたら、あのおとこのこみいだつたから、私もそうおもったんです。でも、先生がきゅうに私のほうをむいて、“そして、その人はグレースです。”といいました。それをきいた私はびっくりしました。そして、みんなが私にちゅうもくしていたから、はずかしかったんです。そのはなしのあと、たいいくかんまであるいたとき、どきどきしたせいであしがふるえただから、あるくことがよくできませんでした。そひて、その夏、私はカナダだいひょうで日本にはいくキャンプにさんかするために行きました。そして、日本にいたいっしゅうかんのあいだにたくさんすてきなおもいでがつくられて、せかいじゅうのこどもたちとともにだちになれたからうれしかったです。これは五年前のはなしですが、そのあと、たくさんのえいきょうをうけました。日本であった人たちとまだともだちで、そして日本が好きになって、こうこうで日本語のべんきょうをはじめました。そして、私は日本人とおなじくらいに日本語ができるまでべんきょうして、いつかにほんにまたいきたいです。そして、にほんにいるともだちとまだあって、はいくキャンプでできなかつたいろいろなしをしたいです。

私の学校生活

Jeff Oh

国によって文化が違うように国によって学校生活や教育制度も違うと思います。もし、自分が慣れてきた文化とは全く違う国の学校に通うことになったらどうなるのでしょうか。私は今でも四年前に始めてカナダの学校に来た時のことを覚えています。新しい友達ができる興奮よりも英語があまり喋れない不安や緊張のほうが大きかったです。しかしその不安や緊張はすぐに感じなくなりました。毎日異文化を受け入れることに忙しくて、不安を感じる余裕さえなかったからです。

私がカナダの学校の生活の中で驚いたことは教育に対する考え方が韓国と全然違うということです。韓国の教育に対する熱意は世界的に有名です。普通の韓国の高校生は午前八時までに学校に行って午後五時に授業が終ってから十時まで学校で自習をして、そのあと休まずに塾に行って午前十二時から一時ごろ家に帰ります。私はこのような韓国の学校生活を送ることに疑問を感じていました。そして高校生は勉強以外の時間も必要なのではないか思い、カナダに留学することに決めました。韓国の学校生活に慣れていて私にとって学校が午後三時に終わってその後は自分の時間を自由に使えることは新鮮でした。しかし私は留学してから半年間は学校が終わってから勉強以外には何をすればいいか分からなくて結局また勉強をしてしまいました。韓国での勉強だけの生活がいやでカナダに来たのにまた勉強をしてしまったのです。時間を自由に使うことに慣れていなかったなのでその時間の使い方も分からなかったです。周りの友達に学校の後何をしているか聞いたら、みんな自分の趣味に時間を使っていました。せっかく自由な時間があるのだから勉強ではないこともしてみたくくなりました。そして私は前からずっと興味があった写真を撮ることを始めました。また、学校の行事やボランティアにも積極的に参加するようになりました。韓国とカナダでは高校生の時間の使い方が全く違います。韓国にいる時は時間に追いかけて、心にもゆとりがありませんでした。ですからいつも自分のことばかり考えていました。今は時間にも心にもゆとりがあるので、もっと周りを見て他の人のことを考えるようになりました。

カナダでの学校生活は私の生活や考え方を大きく変えました。勉強以外のことにも時間を使えるようになったのです。私はカナダの高校を卒業した後は日本の大学で勉強したいと思っています。もちろん日本で勉強することも楽しみですが日本での自由の時間を考えるとますます早く日本に行きたくなります。

私たち家族のスペシャルな思い出

Semi Ok

子供の頃、父の仕事の都合で日本に引っ越した私たち家族は日本での5年間の中、家族旅行はたったの2回だけでした。父はいつも忙しく、休暇には韓国にいかなきゃならなかったので泊まりでどこかに行くことはありませんでした。家族旅行に行ったとしても私たち家族は旅行に恵まれないのか、2回の家族旅行も結局失敗に終わりました。

私が三年生だったときの冬、以前から家族旅行に行きたいと 言っていた私たちのために父が 週末に東京からあまり 遠くないところに 連れて行ってけると言いました。興奮した私と姉は さっそく はりきって パンフレットなどを 漁って その中で 小さくてもきれいでご飯もおいしそうな 海辺のホテルに決定しました。

旅行当日、私たちはバスで水中のトンネルを渡っていくと聞き、魚が見えるのかなととても期待していましたが、中には 薄暗い黄色のランプが点々とつづいていました。がっかりした私は母に「海の中にあるトンネルなのに魚、見えないね」と言ったらそんなわけないと笑われてしまいました。私たちが楽しみにしていたホテルは、予想やパンフレットに載っているものとは大きな差がありました。古くて、汚いうえ、海もちゃんと見えませんでした。さらに、当日雨も降っていたので海にも行けずホテルの中になきゃなりませんでした。いらだちを我慢し、このホテルに決めた一番の理由の、かに食べ放題を食べました。けれど かにには予想以下で全部細くて干からびていました。

その夜、寝てしまおうともったいなと思った私たちは、写真を撮ったりテレビを見たり話をしたりして起きていました。やっと眠りにつこうとしていたら、急に母と父が騒ぎ出したので、見てみたら なんと 壁にはムカデや名の知らない虫たちが、天井には蛾がぶら下がっていたのです。それを捕まえようと 皆で騒いだ後、虫が大の苦手な私と姉は、そのまま寝たら虫が口に入ってきたようであまり眠れませんでした。結局一睡もできなかった私たちは 眼の下にくまができ、お互い見ておなかが痛くなるまで笑いました。帰るとき、ホテルが気に入らなくて不機嫌だった私たちのために父が買ってくれた、白くてかわいいアザラシのぬいぐるみは 帰り道を楽しくしてくれました。失敗に終わったけれど、5人家族全員そろってどこかに出かけること自体が良い思い出になりました。

私たち家族に2度目の機会はある日、急にやってきました。父が新しく車を買ったので、ドライブ兼、計画なしで大阪に行こうと言い出したのです。新しい車は広くてとても楽でした。しかし、長い運転に疲れてしまった父は途中にある街に入り、1泊するためにホテルを探しました。ところが、なんと ホテルを探しに行った母が父の財布を失くしてしまったのです。大阪に行くためのお金は全部その財布に入っていたのに、なくなってしまったのでみんながっかりしながら

そのまま家に帰ることになり、来た道を戻って行きました。幸い、お金を少し持っていた母が帰りに寿司やに行き寿司を買ってくれました。帰り道に、当時3才だった弟が ふと、「僕がうるさくて ママがパパの財布失くしたんだよ、ごめんね。」と言い、静かだった私たちはがっかりしていたことも忘れ大笑いしました。帰り道にみた、東京では見れないきれいな星空、腹ペコの時食べたおいしかった寿司、そして、幼い弟の大人らしい一言で、私たちの2度目の旅行も終わりました。

こうして 2回とも失敗に終わった私たちの家族旅行。しかし、普段の旅行よりもっとたくさん思い出、思いやり、笑いをくれた旅行だったので 今では 一生忘れられないわたしたち家族だけのスペシャルな思い出です。

おいしい笑顔

Jacqueline Chiu

二年前の夏から どうしても日本語が習いたくて、とうとう母に頼んで夏の集中コースをとり始めました。でも次の年、中級に入ったころ、母からもう15歳なんだからできれば、自分で日本語の授業料を払ってくれたら、たずかるんだけどといわれてしまいました。そして「もう、仕事見つかったの」といつも聞かれて、どうしても仕事が必要になったわけです。

それは去年の二月のできごとでした。アルバイトといっても何の経験もない、

こんな若い私をだれがやとってくれるのかな、と考えました。それからとにかく、いろいろな店に履歴書を出しましたが、どこからも返事はありませんでした。もうあきらめかけていたのですが「マクドナルド」だったら、ひょっとして、やとってくれるかもしれないという気がして履歴書を出してみました。

そうしたら、何と、インタビューの電話がきたのです。15分のインタビューは胸がドキドキして地獄にいるみたいな感じがしました。私はすごくきんちょうしました。もしもこれにしっばいしたら、もうだめだと思ったんです。でもそんな心配は、きえてしまいました。この私をやとってくれたんです！私は超うれしくて夜も寝られないし、学校では集中もできませんでした。仕事を始めた最初のころはすごくきんちょうして、いつも間違いつてしまいました。でも店長さん達はやさしく私をなぐさめながら、ていねいに教えてくれました。

でも、本当の事を言うと、前の私はもっとカッコいい所で働きたいと思っていました。それで仕事になれてくると、だんだん心の中に不満がでてきて、いやになりました。時間給も低いし、お客の注文はうるさいし、ホームレスのようなボロボロのかっこうをしたよっばらいが来て、私はそんなお客の相手はしたくないと思うようになったのです。そのころに、もし誰かに「どこでアルバイトをしているの。」と聞かれたら、はずかしくて本当の事が言えなかったと思います。

でも今は「はずかしい」とは思いません。このお店で十ヶ月間働いて、今では「Crew Trainer」にもなりました。お金をもらっただけではありません。忍耐することを勉強しました。人に教えたりはげましたりできるりっぱなリーダーになるための道を、今私は歩いているんだと思います。ここで習った事はぜったいに忘れません。ここでの経験は将来、きっと、やくに立つでしょう。今もし誰かに「あなたはどこで働いていますか。」と聞かれたら、自信と誇りをもって「マクドナルドで働いています！」と笑って答えます。

ありがとうございました。

心の方向

Jacob Park

皆さん、子供の時何になりたかったか覚えていますか？私は世界の大統領・億万長者・ウルトラマンになって地球の平和を守りたかったです。しかし、世の中ではそんなかんたんに人生をきめられませんよね？高校三年生になった時もっと現実的に将来のことを考えなくちゃいけないでした。必要な勉強は何か、その就職ができるか など、いろいろ考えて、化学にきめました。しかし大学一年生の時、その勉強にぜんぜん興味がなかったと気づきました。卒業してから 十年、二十年ごも本当に楽しいかどうか考えました。答えは、いいえでした。「じゃ、どんなことが好き？」と自分に聞きました。やはり 私が一番情熱を感じた授業は高校の日本語の授業でした。時には難しくても、興味をもってならった日本語や、楽しかった勉強を覚えています。しかし、大学で日本語を取ると言うのは私の専門をあきらめるのと同じことでした。

去年の夏休みに、日本で働いてた父がよんでくれました。リラックスして将来のことを考えるいいチャンスだと思って行きました。その二週間は私の人生の中で最高の二週間でした。日本と日本の文化がどれほど好きかがはっきりわかりました。のぼせた温泉、しずかな田園、にぎやかな都市、いつも開いているコンビニ、数え切れない自動販売機、面白い日本テレビ番組、沖縄のきれいな海、きれいな女の人も。そして、私がしらなかったことがまだ日本にたくさんあったと気づきました。その知らない日本を見つけるために、日本語をもっと勉強したかったです。

そんな時、私は父に将来のことを相談しました。父は言いました。「人生には、地図はないけれど、心の中に方向が見えるんだ。それをたどるしかない。」この言葉を深く考えました。「心の中に方向がみえる」、つまり自分の中にある情熱が道を教えてくれるのでしょうか。もちろんすべての道が同じではありません。どんなことが あるのか わかりませんが、目的はわかります。それは幸せになることです。お金や、名誉だけをもって幸せじゃなかったら、意味がないんです。幸せになれば、元気になるし、仕事がよくできるし、ほかの人にも幸せにできます。去年私が歩くはずだった道はあきらめたけど今でも後悔していません。私の心に聞いていなかったら、ここにいることも、皆さんにスピーチをはっぴょうすることもなかったかもしれません。私の幸せを皆さんにおわけしたいです。また日本語を勉強できるので私は本当に幸せです。そして、その幸せを皆さんにおわけしたいです。

少し前に、心にある道を歩けば、人が幸せになれると申しました。それは皆さんの人生がゆたかじゃないと言うわけではありません。しかし、私たちは もっと幸せになる可能性を考えたことがあるでしょうか？みんなの心の中にパッションがあります。生きる意味があります。私たちの心は道を教えてくれますが、自分の意欲で歩くしかないんです。心が教えてくれる道は

大変でごつごつしていて、目的が見えない時もあるかもしれません。それでも、その道は間違いではありません。つらい時でも心を信じてがんばれば、きっと目的に到着できます。ただ、もう少しがんばって歩いてください。

皆さん、今日あなたの心はなんと言っていますか？ 正しい道を歩いているでしょうか？ 私たちの心で人生の宝物を探しましょう。

あきらめないで

Anais Pang

先月、私は五月から UBC の政治学部で勉強することになりました。ついに UBC に入学できて、とてもうれしいです。実は、二年前私は香港の大学入学試験に落ちました。将来が見えない、親に申し訳ない、どうすれば良いのかわからなくて、暗い毎日でした。でも、学校をつづきたい、もっと色々な事を習いたい、経験したいという事だけははっきりとわかっていました。それからたち直って、一生懸命頑張って、カナダのカレッジに入りました。

やっとカナダに来ました、新しい人生を凄く期待していました。でも、興奮と同時に、辛さが来ました。私の選んだ専攻は政治学で、アジア系の学生はほとんどいない。先生の話と授業の内容も難しくついて行く事ができませんでした。でも、周りの学生はみんなディスカッションで凄く盛り上がっていました。私は自分の意見が言えないので悩みました。毎晩教科書を朝4時まで読んでも意味がよくわかりませんでした。プレッシャーで、毎晩泣きたい位でした。

もう少しであきらめてしまいそうな私を助けてくれた人が二人います。一人は歴史学の先生です。ある日、先生に聞きました。なぜカナダ人の学生は授業の前あまり準備していないのに、ディスカッションで自由に話せるのかと。先生はこう言いました。「カナダ人の学生は自分が全部わかっていると思って、論文を書くときは適当にしています。でも、ESL の学生は、勉強するときは必ず辞書で調べて、わからないところがあれば何回も繰り返して読むので深く理解できます。たとえ時間がかかっても、そのほうが正しい勉強の仕方です。」その言葉を聞いた後、急に元気が出てきて、その後のディスカッションでは発言もしてみました。話すときは緊張しましたが、意外と、みんなは真剣に聞いてくれました。みんなアジアの事はあまり知らなかったのも、私の意見に興味をもってくれました。私は少しずつ自信が持てるようになりました。

もう一人、私を助けてくれたのはミリアムです。私はオックスファムという NGO に入っています。そこで、いろいろな事を勉強しています。ディレクターのミリアムは体が小さいけど、とてもりっぱな女性です。彼女は18歳の時からガテマラで女性の権利と貧困についてずっと活動してきました。しかし、彼女は女性なので、彼女の話聞いてくれる人はほとんどいなかったそうです。でも、ミリアムは諦めずに、貧しい人たちや政治家などと話し続けて、今ガテマラは少しずつ良くなっていると聞いています。その後、ミリアムは一人でカナダへ来て、自分の国の状況を世界に伝えながら、世界中色々なところへ行ってこまっている人を助けています。私はミリアムを大変尊敬しています。ミリアムからも、成功する人はあきらめないという道理を習いました。

難しい事は人生の中には何度もあります、できないからしない、嫌いだからやらない、それは全部言い訳だと思います。もしあきらめてしまったら本当にそれで終わりだと思います。だから、みなさんどんな困難があっても、諦めずに一緒に頑張りましょう。

世界中で一番美しい笑顔

Ah Young Park

『ほしい！自転車ほしい！』泣きながら一時間半ずっとお願いしました。でも母と父は許してくれませんでした。『この町には車も多いし、危ない！絶対だめ！』と言ってる母の言葉を聞かずに、私は黙ってたばこを吸っている父の腕を捕まえたままお願いし続けました。

「でも友達皆持ってるもん！私だけなの、持ってないのは！」

私が最後の望みを掛けたこの言葉にも動揺せず、父はあいからず黙ったままでした。豊かではない家の事情がまだ分からなかった私はただ自転車を買って貰えないことに怒って、その日は晩ご飯も食べませんでした

次の日、学校から帰って来て祖母とテレビを見ていた時、だれかが私の名前を呼びました。

『アヨン、ちょっと出て来てよ！』なんだろうと思って出て行った私はびっくりしました。会社にいるはずの父がそこにいました。父の右側には私がずっとほしかった自転車がありました。すごく派手でカラフルな、とてもかわいい自転車でした。でもその自転車よりも素敵だったのは父の笑顔でした。後で分かった事です、その高い自転車を買って、何日間か父は会社で昼ご飯を食べられませんでした。昼ご飯を買うお金で私の自転車を、それも店で一番いい自転車を買ったのです。誇らしげに新しい自転車に乗って遊んでいる私を見ながら父は世界中で一番美しい笑顔を見せて 幸せそうに笑いました。

今でも父は私がほしい物は何でも買ってくれるし、したいことをさせてくれます。今も、父のそう言うところは昔のままです。でも一つ、変わったことがあります。それは、小さかった私がこんなに大きくなった分、父も年を取ったと言う事です。春が過ぎたら夏が来るように、自然で当たり前のことなのに、なんだか少しさびしい気がします。父の増えていく皺や、多くなってる白髪や、厚い老眼鏡を見ると私は心が痛くなります。

成長して父との会話が減り、だんだん父を頼らなくなっていく私を見ながら、父はさびしいのかも知れないと思うと涙が出てしまいます。いつも自分のことよりも私のことを気にしてくれる父は今でも電話をするといつも言います。『必要なことはない？大変なことはない？あったらなんでもお父さんに言って。お父さんがアヨンのことを守っているから頑張って。』

すべてのことをしてくれたかった父、そして何も分からず貰うことばかりだった私。私は今になって、昼ご飯まで我慢して自転車を買って、その自転車に乗っている私を見ながら幸せそうな笑顔を見せた父の気持ちが、ちょっとだけ分かる気がします。

私が小さかった時のように肩車も高い高いも出来ないし、今は一緒に運動しても三十分が限界の父。悲しい映画を見ると私よりも早く泣いてしまう父。だけど、私はそんな父が大好きです。父の大きな愛に包まれて、今の私があります。これからは父に貰った愛を少しでも私からお返し出来たらいいなあと思っています。

温泉の良い点

Kyle Vandersteen

みなさん、こんにちは。私は日本文化の中で温泉が一番好きです。温泉は大切な素晴らしい日本の文化だと思います。何故なら、カナダのホット・スプリングと違うし、伝統的な事だし、スキンシップすることもできるからです。さらに私は、温泉によって自信が高められました。私は、温泉の良さについてお話したいと思います。

私はカナダで日本のような温泉を見た事がありません。日本とカナダを比べると、日本は国が小さくても、カナダより温泉が多いと思います。温泉には色々なタイプがあります。例えば露天風呂や混浴です。そして、日本とカナダの温泉の一番違う事は服の規則だと思います。日本では温泉に入るときに全部の服を脱ぎます。でも、カナダでは水着を着けます。日本の温泉は、私の新しい経験でした。

私は日本で最初に温泉に入ったときにはちょっと怖かったです。日本にいるからその伝統的な経験をしなければならないと思いました。その日には、友達が一緒に同じ旅館にいましたが、入らないと言いました。でも、私達の泊まっていた部屋は冷たいシャワーしかありませんでしたから、その友達は私が入った後でおそろおそろお風呂に入りました。その経験で温泉に慣れることができ、私達はもう怖くなくなりました。そして、その日、私は二回お風呂に入りました。

その後いつでも、機会があったら、銭湯と温泉へ行きました。そして、色々なお風呂へ行きました。私は自分の裸の体を人に見られることに慣れて、恥ずかしくなくなりました。普通の人の体が見られたので、自分の体を恥ずかしいと思わなくなりました。私が恥ずかしかったのは、普段の生活で普通の人の体を見ないからです。通常、人々はテレビや雑誌で有名な人やモデルの体を見ます。それで特別な人間のイメージができます。ちょっと生活習慣病に似ています。でも、温泉でその間違ったイメージを直すことができます。太っていても、やせていても、大丈夫だと信じられます。皆の体が違うことがわかります。体が違っていても誰も悪口を言わないし、楽しく話をします。それで、日本の温泉は良いと思います。

温泉で大事な言葉を知りました。日本語でスキンシップと言うことばがあります。スキンシップは肌と肌が触れ合うことです。昔、親と子供はお風呂でスキンシップをしたと聞きました。スキンシップで人々は強く絆ができたと思います。普段は日本の温泉は男性と女性を分離しますが、時々一緒に入る事があります。昔、そんな混浴は現代より多かったそうですが、最近減ってきたそうです。そして、今の時代の人々は家族のスキンシップがあまりできないと思います。しかし、スキンシップは、お風呂の一番大切なところですよ。

人々は温泉で色々な事ができます。確かに温泉は気持ちが良いです。そして、自分の体に自信を増すこともできるし、家族の絆を強めることもできます。その理由で私は温泉が素晴らしいと

思います。

皆さん、温泉やお風呂に行ってみてください。大切な事がわかるかもしれません。これで私のスピーチを終わります。聞いてくださって、ありがとうございました。

日本のブックオフ

Chan Mi Lim

皆さん、「ブックオフ」という中古本屋さんをご存知ですか。日本に住んでいる人ならきっと一度はブックオフに行ったことがあると思います。実は、バンクーバーにもブックオフが4年前にできて、私も好きな歌手のことが載っている雑誌や話題になっている小説を探すためにダウンタウンにあるそのお店によく行きます。今日は皆さんに私の大好きなブックオフをご紹介します。私の考えを述べたいと思います。

ブックオフは日本のまんがを始め、小説、雑誌など、色んな種類の中古本を扱っていて、しかもとても安い値段でそれら販売しているため、たくさんの人に愛されている中古本屋です。普通、中古本屋というと、小さくて、ふるくて、ほこりだらけの本が並んでいて、そしてお店に入っていても、知らん顔して返事もしてくれないおじさんがいるイメージが浮かんでくるでしょう。そんなイメージを180度変えたのがブックオフコーポレーションの設立者の坂本隆さんです。

1990年、坂本さんは神奈川県の実業街でお店を始めました。どうせやるならほかの業者とは違う店にしたいと、店ばかりでなく本もきれいにし、値段はお客さんが気軽に買えるようなものにしました。それ以来、支店をどんどん増やし、現在では、902店ものブックオフが全国に広がって、「宅本便」(たくほんびん)のサービスも提供(ていきょう)しているようです。なぜ普通は地味だと思われる古書店がこんなに人々に受け入れられたのでしょうか。

ブックオフが人気となった理由の一つはお客さんに少しでも近づこうとする努力でした。普通の古本屋がよく使う宣伝文句「本を高く買います」の代わりに、「お売り下さい」と言うやさしい表現を使って本を売ってくれる人を惹き付けることに成功したのです。中古本屋はお客さんから買った本を売るのが仕事ですから、本を手に入れるのが何よりも重要です。そして、お客さんから中古本を買い、細心のリペア過程を経て新品同様に本をリメイクして、お客さんに見つけてもらいやすく陳列しています。こんな努力の積み重ねでブックオフは古本屋のイメージをガラリと変えたわけです。

よく考えてみれば、ブックオフの成長はバブル経済がはじけた後の日本社会において本の新しい消費パターンを作ったのではないかと思います。読み終わった本でも家に保管していた日本人の読書習慣をブックオフが変え、読んだ本をブックオフに売って、そのお金で別の本を買う読書文化が広がりました。この発想は画期的で、狭い日本の住宅事情を改善する意味でも大きな貢献だったと思います。

ブックオフのホームページによると、現在、ブックオフは本専門店以外にもリユースのコンセプトを利用して、ビデオ、DVD、服、生活用品などのリユース業の店を運営しているそ

うです。1990年代から、不況が続いている中で成長を維持しているブックオフは「使い捨て社会」を「ものを最大限にリユースする社会」に変えることに貢献していると言えるでしょう。

そして、何よりも、ブックオフの成功は経済が不安定な世の中になってきている今日においては、人々に大きな励みを与えてくれたのではないかと思います。なぜなら、望ましくない環境においても、前向きな態度で、何かその時代の状況にあった新しいアイデアを考え出せば、きっと難しい局面をうまく乗り越えることができ、坂本さんのように大成功して、新しいトレンドを作ることができる事が証明されたからです。

夢探し

Anna Kim

子供のとき私は絵を描くのが大好きで、大人になったら漫画家か画家になろうと決めていました。友達と遊ぶより、家で絵を描いている方が楽しかったんです。しかし、韓国の教育は厳しくて小学校に入ってから学校の勉強に時間をたくさん費やさなくてはいけなくなりました。私は徐々に漫画家や画家になる夢をあきらめていったのかもしれませんが。

中学2年生の時、母の勧めで私はカナダに留学することになりました。母は私に外の大きな世界を見せるために海外に行かせようとしたんですが、私はむしろ夢を完全に失ってしまいました。英語が上手ではない私には外国の生活は大変でした。韓国ではいつも母がそばにいてくれたんですが、カナダでは誰もそばにいてくれません。寂しさに喘ぎながら、私はますます描くことから遠ざかりました。絵のことより、歌手や映画俳優の話のほうがクラスメートと話しやすかったし、何よりも学校の勉強がとて忙しくなりました。

夢はいつの間にかうすぼんやりしてしまっって私は何がしたいか分からないまま大学に入学しました。大学には色々な人がいて、その中には夢があってそれに向かってちゃんと生きている人がいました。私はやっと自分がどんな人になりたいかも分からない「バカ」だということに気づいて、私はその時から自分の将来について真剣に考え始めました。でも、全然わかりませんでした。音楽が上手な人を見れば、私も音楽が上手になりたかったし、科学の知識が豊富な人を見れば私もそのようになりたいと思いました。けれども、私は音楽や科学などのことを仕事にするような自信がありませんでした。また絵を描いてみようかとも考えてみましたが、美術を専攻している人の作品に比べると私の絵はむちゃくちゃでした。私は無気力になって何の**試み**もせずにあきらめる人になりました。母を恨み、カナダへ来た自分自身も恨みましたが何も変わりませんでした。

しかし、これからはためらわず色々なことをして見ようと思います。なにもしないであきらめてしまったら、自分がどんなことができる人間なのかが分からなくなってしまうからです。ある有名な芸術家は描くことをお爺さんになって始めたというし、韓国の有名な画家は会社に勤めながら絵を描いていると言っています。また、日本国内だけでなく、世界でも有名な日本小説家の村上春樹は、29歳のとき、或るアメリカの野球選手の素晴らしい活躍を見て感動し、それがきっかけで、小説を書き始めたそうです。彼は別に作家になる願望や夢などはなかったし、作家としてのスタートもわりと遅かったのですが、子供の時から、西洋の小説を読むのが大好きだったらしいです。だから、いつ自分のやりたいことを発見しても遅くはないはずですよ。

そう考えるようになって、わたしはもう将来のことを迷ったり、心配したりしなくなりました。そして私は「情熱」ということを考えるようになりました。「努力する人は天才に負けない。自

分がやっていることに情熱が持てる人は努力している人にも負けない。」という言葉があります。私は自分がやっていることに情熱が持てる努力家になりたいんです。今は夢を捜すよりも、むしろ自分の好きなこと、自分にできることに情熱を傾けて、がんばってやってみるしかありません。そうすれば、自分の行く道が自分でも気がつかないうちに目の前に拓けて、どんどん進んでいけるはずです。

見てもらう事は、認めてもらう事

Stephanie Ching

今日、私は日本のサブカルチャーの一つであるコスチュームプレイ、略称「コスプレ」についてお話したいと思います。定義上では、「コスプレ」はアニメや、漫画、ゲームなどの登場人物の着ている服や髪型などを真似てそのキャラクターになりきる事を指し、コスプレを行う人の事をコスプレイヤーと言います。私も四年ほど前からコスプレをするようになり、休みの日や、大きなイベントがある時は友人と一緒にコスプレをしにでかけ、アニメや漫画の趣味のあう仲間を見つけたり、写真を撮るなどして楽しんでいます。

ですが私は、コスプレが変わった趣味だと言うことを知っているのですが、今まで学校の友人や仕事の同僚から、自分がコスプレイヤーだと言うことを隠してきました。更に、父に「大学生にもなって、こんな子供のような事をするのはやめなさい」と言われて以来、コスプレをするのが好きなのにも関わらず、この趣味に対して嫌悪感を抱くようになりました。この父の言葉は私がコスプレが社会から否定的に考えられている物なのだと知る、決定的な一言でした。コスプレは風紀を乱すと、問題視する人も少なくありません。コスプレをするのは、社会的にモラルから外れている事なのではないでしょうか？

本来、コスプレと言うのはいつもの自分と違った人物・キャラクターになれると言う現実逃避のような物だったのだと思います。今でこそ、全世界で約六十万、一年に十億ドルも動かす大きな産業になりましたが、二十年前はコスプレと言えば看護師さんや女子高生のセーラー服を着るなど、普段と別の格好をすることで性交渉においてモチベーションを高めたり、キャラクターになりきる事で満足感を得たりすることを目的としていたのだと思います。

ですが最近ではコスプレのあり方も変わってきました。コスプレイヤーの人口が上昇するのとともに、その世界的な普及力と装飾の芸術性が着目され、コスプレのみを取り上げる雑誌や新聞記事、企業が主催する大きなコンテストなどが出現するようになりました。コスプレをテーマとした飲食店や、有名人にコスプレをさせて商品をアピールする広告なども日本ではもう、珍しくありません。2003年から世界サミットという国際的なコスプレコンテストが毎年開催されるようになり、去年は日本の経済産業省もスポンサーとなって参加したそうです。このことから、コスプレの社会的認知度が年々上がってきている事がわかります。コスプレイヤー達もただキャラクターになりきる事を目的とするよりも、個人の身体的な特徴や衣装を作るための技術力・その衣装を見せる為の表現力を活かした「人に見せる為のコスプレ」をするようになってきたと思います。漫画やアニメは総じて二次元なのに対し、コスプレは三次元だと言うことも考慮され、コンテストなどではいかに現実的で完成度の高いキャラクターに見せるかも要求されています。つまりコスプレは年月を経て、芸術に昇華されてきたのです。

もちろん私も、「人に見せる為のコスプレ」を目指しているコスプレイヤーの一人です。去年、友人とトロントのコスプレコンテストに参加し、ベスト・プレゼンテーション賞を頂いた時は、私のコスプレが一つの「作品」として認められたようで、とても嬉しかったです。父に辞めなさいと言われた当初は、自分がそんなに不健全な趣味を持っているのか、と深く傷つき、悩みました。ですが、それは今まで父にこの趣味を理解するチャンスが無かったからであり、コスプレという私の趣味を芸術だと認めて欲しいと、私は思っています。たくさんの方がコスプレを目にするようになり、また、理解するようになってきたことは、コスプレが日本のサブカルチャーから、一種の「文化」として変化してきていることの現れなのではないでしょうか。見てもらうこと・知ってもらうこと、が結果的に認めてもらうことに繋がると、私は信じています。今までも、そしてこれからも私に達成感と幸せを与えてくれる、このちょっと変わった「文化」を皆様に披露するために、今日はスピーチをさせていただきました。ご清聴、ありがとうございました。

民族の間の調和

Yan Xu

一ヶ月前、UBCで勤めているプログラムのイベントで、一人の国際学生にカナダの印象をたずねたら、「ここの人々は、自分がどこから来たのか何人なのかを聞かず、みんなをカナディアンとして受け入れる文化がとても気に入っている」という答えを得た。この大地に足をつけて十年ちかい私にとって、それは当たり前のようなものだったが、その学生は中国から移民した両親を持ち、スペインで生まれ育ったが、そちらの学校では中国の血統を持っていることで現地の生徒に距離をおかれたという。この印象深い会話は、私の脳裏に刻まれ、そして私は民族の調和について深く考えるようになった。

この広大な世界には、さまざまな民族や人種が居住している。これらの民族が調和していればいいのだが、実際、人種差別が絶えることなく蔓延している。それは、遠い他の国にある問題だけではない。人権擁護の模範として世界的に知られているカナダでも、原住民居留地の分配問題が指摘され、そして、近頃では人頭税の対象になった家族に対する補償をめぐる論争が報道されている。

私たちの身近にある学校でも、人種差別がないわけではない。ポップカルチャーの影響か、校舎の廊下を歩いていると、よく差別用語が飛び散る。話し手は悪意を含めたわけではないが、その周りにいる少数民族の感情を損ねたことであろう。

「差別は未知への恐怖から生まれる」という言葉をよく耳にする。もともと差別は、知られていない民族と自分の民族の違いから始まる。だから、民族の調和を果たすには、他の人々の慣習や生活をお互い学ぶ事が大事です。自分にとってどんなにおかしい行為にも、その理由と利点があるから、それらを積極的に理解する必要がある」と私の高校の恩師が教えてくれた事がある。他人の優れたところを習ってこそ、自己向上する事が出来る。他の民族と接する事は、人種問題を解決するだけでなく、新しい物事を習い、自己の見識を広める事が出来る一挙両得な行為なのだ。そして、他人の立場に立って自分の行為を評価することこそ、お互い尊重しあう多元文化に導く第一歩なのではないだろうか。

調和を果たすには勇気が必要だ。この勇気は人間の平等を愛する気持ちがなければ出てこないのだ。今の世界経済は、確かに長い不景気に落ち込んでいて、社会問題から目を背けることはごく難しいことではない。しかし、もしみんなが物質に頼る生活より、この社会を構成するさまざまな文化の交流に少しでも力を注げば、未来の世代にお互い理解しあう態度を身につけさせることに違いない。これは経済や工業、そして財産以上に大切な富であり、この思いこそが、平等に人を扱う態度の原動力なのではないだろうか。

民族の調和は、政治家がする事だけではない。私たち一人一人の努力は、調和に貢献しているのだ。

若い頃の声

Grace Ho

高校生の時に、私は初めて日本語弁論大会に参加しました。その時は、その体験が私にとってこんなに大切なものになるとは夢にも思っていませんでした。それから、学校を出て、結婚し、子供を生み、今は、高校の教師や母親として、若い世代の人々を教えています。結婚も、教師という仕事も自分で選んだことですが、完全な幸せを感じたことは、ありませんでした。息子が生まれた後、母親になったすばらしさにもかかわらず、私の一部分が死んだように感じました。二、三年の間は、元気も出ず、私が私自身として暮らすことが出来なかったのです。私も母と同じように子供の為に生きるだけだなのだと思っていたのです。でも、子育てや教師の仕事を通して、子供たちから教えられることが多いことに気が付きました。単調に見える子育てや仕事の中にもたくさん学びがあることを知って、私はちょっと元気が戻ってきました。さらに、私は私自身の若い頃の声も思い出しました。

十七年前、高校三年生の時、「異文化理解と言葉の勉強」というスピーチを発表しました。そのスピーチの内容とは外国語を学ぶことによって異文化の理解が深まり、私の偏見を見直すことが出来たということです。私は去年の九月に運動の為にカポエイラを始めました。カポエイラは、五百年前、ブラジルで働いていたアフリカ系の奴隷が始めた、トレーニングだとばれないようにダンスを装った武道です。先生やほとんどの生徒がポルトガル語を話していたので、最初のクラスは肉体的だけではなく、文化的にも挑戦でした。その為、ポルトガル語も習おうと思い、今はブラジルのコミュニティー協会でもポルトガル語のレッスンを受けています。この経験によって、ブラジルとアフリカとポルトガルの文化にもっと近付くことが出来ました。突然、まだ行ったことがない国々に興味を持ち始めたのです。私はやっと自分がどういう人間だったかということ思い出しました。高校生の時のスピーチにある「言葉の勉強は文化を理解する鍵です。」というメッセージがまだ生きているのです。

十五年前、大学二年の時、「政治への関心」というスピーチを発表しました。そのスピーチのテーマは、若者が政治や社会上の問題について関心を持つ大切さです。その頃、中国系のカナダ人は政治にもっと参加できるように戦っていました。今は、国立、州立、市立のレベルみんなにも、中国系の代表者がいます。私の声が届いたようで、うれしかったです。しかし、このような進歩はまだ完全ではありません。去年のバンクーバー市の選挙の投票率はたった二十五パーセントでした。それは、本当に少なすぎます。まさに今、政治への関心が必要なのです。カナダだけではなく、もちろん日本でも必要なのです。去年の「Change」という日本ドラマをご覧になりましたか。日本のマスコミも若者に対して、もっと関心を持ってもらうよう働きかけているようです。どの世代も一丸となって、働きかけていかなければなりません。私は若い頃の自分の

スピーチのメッセージを今もよく思い出しています。

私は今までに何を学んだでしょうか。好きなことに本気になって頑張ろう。私は新しい言葉を勉強することが大好きなので、今日も頑張っています。自分が言ったことを実行しよう。若い頃の声を覚えている為に、私は弁論大会に参加して本当によかったと思っています。スピーチのメッセージはまだ私の中で生きているからです。一生学習し続けよう。単調に見える毎日の暮らしの中でも新しいことを発見して、子供と一緒に育つことが出来るのです！

最後になりますが、お願いがあります。あなたのとおりの人に次の言葉を言いませんか。「この弁論大会で、十五年後に、必ずまた会いましょう！」